

漂流するニッポン

子どものころ読んだ最初の本らしい本が、ジュール・ヴェルヌの『十五少年漂流記』であった。未知の世界での少年たちの冒険に心が躍ったものであった。実際の漂流はもっと恐ろしいものであるだろうが、それはまた、古くから各地の交流と密接にかかわるものでもあった。島国である日本には、漂流にまつわる話が多い。

630年に派遣が始まった遣唐使は、難破・漂流の危険と隣り合わせであった。とくに、663年の白村江の戦いで唐・新羅軍が勝利した後は半島沿岸を通れず、沖縄経由のルートや五島列島から東シナ海を横断するルートになったが、これらは極めて危険な航路であった。第14代遣唐使佐伯今毛人（さえきのいまえみし）は、五島の福江島で1か月以上順風を待ってから帰京し、その後は病と称して出発しなかったという。

しかしこれはむしろ例外であった。遣唐使節には貴族の子弟が、同行する僧・留学生には傑出した人材が選ばれ、最澄、空海、吉備真備、阿倍仲麻呂など歴史上の大人物が危険を顧みずに唐へ向かった。また、帰朝には多くの渡来人を伴った。難破・失明・妨害にめげず6度目の挑戦で渡来を果たした鑑真は大変な信望を集めたが、唐招提寺の鑑真和上像の柔らかな姿からは、その人物の偉大さが伝わってくる。

ところで、最近のわが国を形容する言葉として「漂流」がよく使われる。船橋洋一氏の『同盟漂流』の影響であろうか。極端ではあるが当たっているようにも思える。

なぜ、漂流なのか。真のリーダーが育たない社会、昔ながらの政治と行政等、さまざまな言い方が行われている。要するに、戦後日本が立脚してきた冷戦体制をはじめとする基礎的条件が変わるなかで、それに対応する戦略を持っておらず、自らの力でそれに対応する能力に欠けている、ということであろうか。

漂流の恐怖を大局的な世界観で克服し、唐の先進的な文物に学ぶとともに、わが国を一人前の国家として唐に認知させようとした遣唐使の時代の思考を、よみがえらせることはできるのだろうか。

本号では、計画外流通米、食品表示制度等を取りあげた。